

20) 大網充填を行った難治性膿胸の6例

山口 明・滝沢 恒世
 齊藤 憲・諸 久永
 上野 光夫・中山 健司 (国立療養所西新潟
 土田 正則 病院外科)
 広野 達彦 (新潟大学第二外科)

全例、男性。平均年齢59.3才(36才～73才)。膿胸の原因は、陳旧性肺結核2例、肺癌肺全摘除術後食道瘻1例、アスペルギルス肺炎1例、肺区域切除術後胸腔内異物1例、免疫不全合併例細菌性肺炎の疑い1例であった。大網充填施行時期は、初回手術時：1例、第2回目：2例、第3回目：2例、第4回目以後：1例であった。手術結果は、5例が成功、1例が不成功であった。不成功の原因は、小さな気管支瘻を直接縫合せず、大網充填だけで手術を済ませた結果、気道からの感染を来したためと推測された。すなわち、大網充填効果を過大視したことが再発原因と考えられた。大網利用の適応は厳密であるべきだが、従来の方法で再発が予想される場合は積極的に行われてよいと考える。

21) 腹壁異常3例の治療経験

—Allen-Wrenn 法を施行した臍帯ヘルニアを中心に—

新田 幸壽 (新潟市民病院
小児外科)
 松田由紀夫 (長岡赤十字病院
小児外科)
 高橋 昌・若桑 隆二
 佐藤 攻・田島 健三
 和田 寛治 (同 外科)
 岩淵 眞 (新潟大学医学部
附属病院小児外科)

長岡赤十字病院にて2例の臍帯ヘルニアと1例の腹壁破裂を経験した。総肺静脈還流異常を合併した hernia into the umbilical cord の1例を心不全で1病日に失ったが、口側盲端の穿孔を伴った回腸閉塞を合併した腹壁破裂の1例と、Allen-Wrenn 法を施行した臍帯ヘルニアの1例を救命した。以下 Allen-Wrenn 法を施行した症例について報告する。

症例は、在胎39週、2545g、正常分娩にて出生の女児。7.0×6.5×5.5cm の巨大な臍帯ヘルニアで、ヘルニア門は 5.5×5.5cm あり一期的閉鎖は困難と判断し、Allen-Wrenn 法に準じダクロンシートを用いヘルニア嚢を被覆した。術後3病日よりベッドサイドで連日シートを縫縮し完全に脱出臓器が腹腔内に還納された状態で27生日に人工膜を除去し閉腹した。術後経過順調で第32病日に退院した。しかしその後灰白便が出現、総胆管の閉塞

が疑われたが、利胆剤の投与により灰白便は消失した。術後2カ月の現在なら問題を認めない。

22) 炎症を伴い、急性腹症として発症した腸間膜囊腫の1治験例

内藤 真一・新田 幸壽 (新潟市民病院
小児外科)
 若佐 理・丸田 宥吉
 藍沢 修・桑山 哲治 (新潟市民病院
第一外科)
 齊藤 英樹・山本 睦生 (新潟大学医学部
附属病院小児外科)
 岩淵 眞

小児の腸間膜囊腫はリンパ系起源のものが多く比較的稀な疾患とされている。今回われわれは、炎症をともない急性腹症として発症した本症の1例を経験したので、若干の考察を加えて報告した。

症例は4才2カ月の男児。排尿時に増強する腹痛で発症し、嘔吐や下痢はみられなかった。近医を受診して内服薬の投薬を受けたが、症状の軽快がみられず、某病院小児科を受診し、急性腹症として入院した。絶食、輸液、抗生剤の点滴などで症状は軽快したが、腹部触診で腫瘍を触れるようになったため、当科に紹介され、入院となった。

腹部超音波検査と腹部の CT 検査では膀胱の上部に多胞性の嚢胞状のものを認めた。開腹所見で、空腸の腸間膜から発生し周囲に炎症による癒着を伴った多胞性の腸間膜囊腫を認め、囊腫を隣接する空腸と共に摘出し、経過良好で第8病日に退院した。

23) 稀な Primitive neuroepithelial tumor の1例

広田 雅行・岩淵 眞
 内山 昌則・松田由紀夫 (新潟大学医学部
附属病院小児外科)
 内藤万砂文・飯沼 泰史

primitive neuroepithelial tumor (以下、PENT) は1973年 Hart and Earle により初めて報告された neuroectodermal origin の稀な腫瘍で、他の未分化小円形細胞腫瘍との鑑別診断が困難で予後不良な腫瘍である。我々は左腹部腫瘍で、病理組織学的検索の他免疫組織化学的、電顕的検討で PNET と診断した症例を経験したので若干の文献的考察と共に報告する。症例は1才の男児で、誕生日頃より発熱、不機嫌が続く他院にて検査時に左腹部腫瘍を触知、精査で NSE、LDH の高値を認め神経芽腫の疑いで当科を紹介され、89年9月21日試験開腹、左腎への高度の浸潤等より化学療法後再手術

とした。組織所見では明瞭な核小体を持つ小円形細胞腫瘍で、免疫組織化学的には神経原性の腫瘍の性質を示し、電顕では胞体内に神経分泌顆粒を有しており PNET と診断、二期手術で腫瘍全摘を行ない、現在、化学療法その他、照射療法を併用し経過観察中である。

24) 当科で経験した小児若年性ポリープ8例の検討

小幡 和也・山際 岩雄
畠中 康晴・鷺尾 正彦 (山形大学第二外科)

山形大学第2外科では8例の小児若年性ポリープを経験し、このうち6例が最近1年間の症例である。年齢は生後2カ月から6才におよび、男児3例、女児5例である。初発症状は肛門出血が6例、他疾患にて注腸造影施行時に発見した1例、腸重積の先進部が1例であり、肛門出血例中1例はポリープが肛門外に脱出し来院した。発生部位は空腸1例、横行結腸1例、S状結腸3例、直腸3例であった。治療は5例に内視鏡的ポリペクトミーを行い、うち1例は巨大にて不成功に終わり開腹摘出した。1例は腸重積手術時に切除、残る2例は肛門外に脱出したポリープを結紮切除した。肛門出血例では病歴期間が長く積極的に注腸造影や内視鏡を行うべきである。

25) 再発乳癌の治療経験

田島 健三・佐藤 攻
若桑 隆二・高橋 昌 (長岡赤十字病院)
新田 幸壽・和田 寛治 (外科)

当科で11年間に経験した乳癌症例373例中、治癒切除再発生存例は11例である。これら11例に対してホルモン療法、化学療法、照射および局所切除などの合併療法を施行し、効果がみられたのでその治療経験についてのべる。

症例1は stage III の男子乳癌で、術後3年目に縦隔リンパ節転移を来し切除したが、その後肺転移と骨転移を認めたため MPA 1200mg/日投与したところ転移巣及び胸水の消失を認め再発後5年6カ月の現在生存中である。そのほか4例に MPA を併用した合併療法を行ないうち2例で3年以上生存している。また対側乳房、卵巣に転移を来したため両者を切除し、アドリアマイシン投与を行なったところ5年5カ月再発なく生存中の1例も経験している。他の例も CAF 療法、TAM 投与にて生存中である。

以上再発乳癌に対し積極的に治療すれば延命出来る例

があることを経験した。

26) 悪性腹膜中皮腫の2症例における石綿暴露の検討

佐藤 鍊一郎・師岡 長
福田 喜一・大川 彰 (秋田組合総合病院)
粕谷 孝光 (外科)

悪性中皮腫と石綿との関連は夙に指摘されているが、腫瘍そのものにおける石綿を検索した報告は腹膜中皮腫に関しては見当たらない。我々は悪性腹膜中皮腫の2例に於て石綿線維及び石綿小体の検索を行い、以下の知見を得た。

1. 症例1の大網腫瘍に於て対照群に比し石綿線維及び石綿小体が有意に多数認められた。
2. 症例2の大網腫瘍中の石綿線維及び石綿小体は対照群に比し有意差はなかったが、シリカ線維が大量に認められた。

近年石綿使用量は急激に増加して来ており、石綿及びその代替品に対する対策が更に強化されることが望まれる。

27) 外傷性外肛門括約筋損傷に対する sphincteroplasty の1症例

島村 公年・滝井 康公
酒井 靖夫・藍沢喜久雄
畠山 勝義・武藤 輝一 (新潟大学第一外科)

外傷性の外肛門括約筋損傷による機能不全に対し、overlapping sphincteroplasty を施行し、良好な結果を得たので報告する。

症例は28歳の男性。平成1年6月、交通事故にて会陰部損傷し、sigmoidostomy が造設された。肛門括約筋の随意収縮は認めるものの、 $12^{\circ} \sim 3^{\circ}$ に筋収縮はなく、肛門管静止圧、随意収縮圧はともに極めて低値を示した。手術は電気刺激を用いて捜し求めた外肛門括約筋の断端を遊離した後、約2cm程 overlap させ縫合した。手術後、括約筋の収縮は全周性となり、肛門内圧検査でも明らかな改善を認めた。sigmoidostomy も閉鎖し、現在、1日排便回数3~4回、soiling もなく、経過良好である。